



おじいさん天使

会社とか、お父さん業とか

地上での役割をたくさんこなした おじいさんたちは、
「むこうがわ」に渡る前に、もうひと仕事がんばります。

天使のおつかいをしているのです。



天使「駅前にいる、この女の子を笑顔に戻してあげてね」

おじいさん「はいはい、では、今日は散歩のコースを変えていこう」

天使「女の子を怖がらせないようにね」

おじいさん「うん、ビックリさせないようにしないとね」

天使「少しのビックリはいいよ。それで気分が変わるもの」

おじいさん「アハハ」



おじいさん天使たちは、少しだけ魔法が使えます。

杖をくるくる回すと、その子に笑顔に戻るためのスイッチを
簡単に見つけられるのです。

天使のおつかいがなければ、こんな人ごみに出てこないんだけどね、と
ひとりごとをいいながら、おじいさん天使は今日の依頼の女の子を探します。



その女の子はお花屋さんの前でボンヤリと立っていました。

一見平静さを装っていたけれど、

おじいさん天使には、女の子が心で泣いているのがすぐにわかりました。

杖をくるくる回しながら、ゆっくりと女の子に近づいて、

「やあ、キミとお花がひとつになって、一枚の絵のようだなあ」

と、軽快に声をかけました。

女の子は少しビックリして振り向きました。目が丸く開いています。

「ああ、いいねえ、キレイだねえ。キミもお花みたいだよ」

女の子は照れて笑顔を見せました。

おじいさん天使も笑顔で、杖をくるくる回しながら
女の子の横を通り過ぎました。

立ち止って長話しをしないことが、おつかいのルールです。
長くかかると魔法がバレることがありますからね。



おじいさん天使とすれ違ったあとの女の子は、
笑顔のまま、自分の心に暖かいものを感じていました。

「うれしいな」

それから、女の子は忘れかけていた楽しいことを次々と思いだしました。
女の子の心の涙は止まりました。



おつかいを終えたおじいさん天使たちは、
依頼主の天使に、いつも報告をします。

おじいさん「あの女の子は笑顔を思い出しましたよ」

天使「おつかれさま。あの子の周りにも笑顔が広がるでしょう」

おじいさん「そうしたら私の仕事がなくなるなあ」

天使「まだまだあるよ。明日はこの子をお願いね」

おじいさん「やれやれ、人使いの荒いことだ」

苦笑いしても、おじいさんは天使のおつかいをやめません。

今日、笑顔になった女の子から最初に笑顔をわけてもらったのが、
なにしろおじいさん自身なのですから。



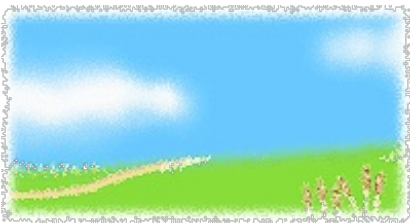
おじいさん天使たちは、長く生きてがんばってきました。
いろんな感情を知っています。
愛が一番いいね、ということも知っています。
そして、天使のおつかいを任されています。

例えば、息子夫婦とケンカをして怒って気分が悪いとしても、
生きていると怒っていない日のほうが、ずっと多いということに気づいています。

だから、イライラしても
すぐに穏やかな気持ちに戻れるのです。
穏やかな気持ちでいると、天使がおつかいを頼んできます。

おじいさん天使たちは、この天使のおつかいが大好きです。

笑顔になった誰かから幸福な気持ちをわけてもらいます。
そんな幸福で、おじいさんの胸がいっぱいに満たされるときがきたら、
天使たちは、いつかのその日に
「おつかれさま。もう休んでね」
とってくれるのです。



おしまい。